

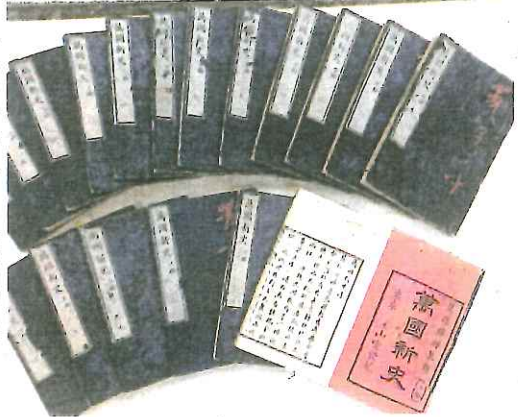
文 化

「権利」「義務」の訳語
麟祥は1846年、江戸の津山藩邸で生まれる。

手元に和綴し本で18冊の「萬國新史」がある。江戸から明治時代を生き延びた洋学者、箕作麟祥の編著書だ。フランス革命から普仏戦争あたりまで約80年間の近代世界史を、ほぼ同時代を生きた人間の視点からつづる。幅広い知識と優れた叙述水準を併せ持つ世界史の本であり、教科書といっても差し支えないだろう。

国立国会図書館のデジタルコレクションに収録
郎らと交流を

古書店で購入した「萬國新史」



ハンガリーを専門に国

生きた近代世界史 翻刻

◆洋学者の箕作麟祥がつづった「萬國新史」を出版◆

南塚 信 吾



求めるようになった。

正確な知識と深い洞察
中でも「萬國新史」は
欧米に限らず、インドや
中国、中南米の一部ア
フリカと広範だ。しかも知
識の正確さと深い洞察に

「萬國新史」は麟祥が文部省翻訳局にいた1777年に編んだ。当時の日本には主な世界史の本として西村茂樹編「萬國史略」や寺内章明編「五洲紀事」があった。いずれも洋書の翻訳だが、麟祥の「萬國新史」は複数の洋書を参照して内容を消化し、自ら執筆もしているのが特徴だ。

翻刻には様々な地域を専門にする歴史研究者が参加したが、内容が幅広く事実確認には苦勞した。インドや中央アジアでは見たこともない地名や人名が出てくる。専門家に問い合わせると、大半は麟祥の叙述が正しかった。明治期によくもここまで海外の動向を正確に把握していたものだとは何度も感嘆させられた。

フランスの哲学者ルソーを「その性激烈にしてすこぶる異常、人を驚かすの説を講じ」などと記しているのも楽しい。一方で「民約」と訳した彼の社会契約論を「君臣の区別、政体の大綱、その源みな国中の人民たがい契約して設立せしところに出ず」と本質を簡潔に言い表している。

67年、パリ万国博覧会に出席する徳川慶喜の弟、昭武に洪沢栄一らと共に行き、そのまま留学。帰国後は文部省と司法省に兼勤し、フラン

ス民法典の翻訳や旧民法の編さんなど近代法制度の整備に貢献した。「Constitution」を「憲法」と訳し、日本で初めて「権利」「義務」という訳語を用いた。

は目を見張る。面白さに没頭し、当時勤めていた法政大学の最終講義で「萬國新史」を扱った。日本史や東洋史、西洋史という区分が成立する前に執筆された本書は、世界各国を自在に取り上げながら叙述する。その後、長らく支配的だった、西洋の国民国家を軸にした歴史研究とは一線を画す。ボーダレスに世界を見つめる内容は、現代を生きる我々にも十分読み応えがあると感じ、約140年ぶりの出版を目指してきた。

日本取り巻く状況考察国際関係では日本の置かれている状況への危機感もにじむ。たとえばアジアにおける英口の覇権争いを書いた章では、中央アジアに進出するロシアや、インドに手を伸ばす英国を描写しつつ、両国のせめぎ合いで揺らぐトルコまで視野を広げる。欧米列強の争いにアジア、ひいては日本が翻

弄される可能性に警鐘を鳴らしているようだ。ようやく翻刻を終えたが検証作業は続く。東京大学法学部の図書室には麟祥の孫が寄贈した「箕作文庫」がある。歴史に関する英仏独語の本を90冊ほど含み、丹念に追えば「萬國新史」がどのような文献に基づいて成立したか明らかになるだろう。翻刻書が多くなると読まれ、今後の歴史研究の一助になればうれしい。(みなみづか・しんご「世界史研究所所長」)

持った。67年、パリ万国博覧会に出席する徳川慶喜の弟、昭武に洪沢栄一らと共に行き、そのまま留学。帰国後は文部省と司法省に兼勤し、フラン